



読書週間が始まります！

今年の標語：「最後の頁を閉じた 違う私があった」

10月27日～11月9日は読書週間です。

秋の夜長にぜひ、本を読んでみてはいかがでしょうか。



## 図書館カレンダー (10月)

20冊・3週間 借りられます

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						



## 今月の展示

### # 小説

長崎ゆかりの本

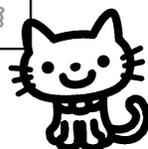
### # 実用書

古典を楽しもう

スポーツの秋

haru-mi 特集

知る芸術



## 館員おすすめの1冊

『みとりねこ』

有川 ひろ／著（講談社）

この本は7編の7匹の猫の物語が書かれています。

最初の2つの物語、「ハチジカン」と「こぼれたび」は『旅猫レポート』（有川浩/著 ※改名前の名前）の外伝です。

小学生のサトルに拾われた子猫はハチと名付けられ、家族の一員として幸せに暮らしていく。しかし、大好きなサトルと突然、別れることになり、新しい家族・ツトムと暮らしていくうちに、ハチは子猫の頃の記憶をうっすらとしか思い出せなくなっていく…。サトルとの再会を待ちきれなくなったハチの物語、「ハチジカン」。そして、サトルとカギしっぽの猫・ナナの物語、「こぼれたび」。それぞれの猫目線で進んでいく物語に引き込まれていきます。

本のタイトル「みとりねこ」は7番目の物語です。食卓の上の小皿の醤油に手のひらをつけ、テーブルクロスに梅の花の拇印をつける猫の浩太。なぜ浩太は来たるべきときに備えて、肉球拇印の腕前を上げておかなければならないのか…

家族の一員である猫たちや家族をつないでくれた猫との心温まる話7編です。私もこの物語のような愛おしい猫たちと出会い、一緒に暮らしてみたいと思いました。有川浩さんの『旅猫レポート』とともにおすすめします。(N)



## 新刊紹介



この他にもたくさんあります！  
貸出中の本には予約ができます

『立花隆 最後に語り伝えたいこと』	立花 隆	中央公論新社
『為替のしくみがこれ1冊でしっかりわかる教科書』	尾河 眞樹／監修	技術評論社
『「在宅死」という選択』	中村 明澄	大和書房
『イチから基礎がよくわかる手ぬいの基本レッスン』	高橋 恵美子	ブティック社
『農家が教えるタネ採り・タネ交換』	農文協／編	農山漁村文化協会
『もっと知りたい尾形光琳』	仲町 啓子	東京美術
『山下清』	山下 浩／監修	平凡社
『みんなのドイツ語』	荻原 耕平 [他]／著	白水社
『川のほとりで羽化するぼくら』	彩瀬 まる	KADOKAWA
『花束は毒』	織守 きょうや	文藝春秋
『アフター・サイレンス』	本多 孝好	集英社
『清少納言を求めて、フィンランドから京都へ』	ミア・カンキマキ	草思社



## 西館日和



～天高く馬肥ゆる秋～

窓を開け涼しくて心地よい風が通り抜けると、手を伸ばして少しの間、爽やかな風を肌で感じていたい気持ちになります。とても過ごしやすいこの季節、ぶどう、梨、栗、柿などのおいしい果物や、田んぼの稲穂も黄金色に実る「実りの秋」の訪れです。

あなたがイメージする「〇〇の秋」は何ですか？運動・芸術・食欲・行楽などいろいろあるでしょう。図書館がおすすめする秋はというと「読書の秋」です。2021年の読書週間の標語である『最後の頁を閉じた 違う私があった』は、没頭できる本に出会い、読み終えた瞬間には、読む前の自分自身とはなにかが変わっていることが表現されています。

どんな本にも最後の頁を閉じた時に感じる思いがあるでしょう。新しい本だけでなく、前に一度読んだことがある本も、頁を開いてみれば、新たな感じ方や感動や発見があり、それは、今の自分にとって新しい出会いになるかもしれません。

この秋にはどんな出会いがあるか、図書館に立ち寄り、本を手にして読んでみてください。

分館長 野下